では面積が記録されている．これらのデータは1インチ1マイル図（1: 63,360）から採録したもので，中には現地調査で得た地名もあるとのことである．一国の地名をすべて記録することは，政治的な有用性はもちろんだが，人文科学，自然誌科学の観点からもきわめて応用性の大きいデータベースを構築することになり，その利用価値は絶大である．カトマンズの書店（たとえば S. M. Trading Center, New Baneswar）で入手できるとのことである．地図をはじめこういう地理的データは，とかく秘密扱いされ勝ちだが，発展途上国でもこのように公開されるようになったことは喜ばしい．地名が郡単位でまとめられているので，われわれには使いにくいが，本書はマイクロコンピュータで編纂されているから，フロッピーデータが提供されることは期待できる．とは言っても，ローマ字化された綴りにはわれわれの感覚とはズレるものがある．たとえば「村」は gaon ではなく gaun であるが，こういうものは慣れるより他はあるまい．官製のものだけに Everest はなく，Sagarmatha の後にかっこ付きで出ているのみである．私の作ったヒマラヤ地名索引 ed. 5（1988）は，ネパール地域に関しては，これでもはや無用のものとなったはずだが，データベースを用いて比較してみたら，ヒマラヤ地名索引の30〜40%の地名は，どういうわけかこの Index に載っていないことを知った．私の索引には調査の途上で聞き書きした地名があり，それには自己流の綴りが用いられているし，スペルの僅かな違い，たとえば ch と chh とか lam と lamo のような，正誤がわからぬまま並べてある．これはこれで有用性があると思うので，ヒマラヤ地名索引の利用価値はまだ残っていると言っておこう．　（金井弘夫）

□三浦宏一郎：**菌類認識史資料（壱）**　185 pp. 1996. 自費出版．非売品．

わが国の古典に出現する菌類関係の単語や記述を網羅しようという試みである．参照された文献は，基本文献として常陸国風土記，古事記など9篇，説話集として宇治拾遺物語など19篇，狂言として合柿など10篇，その他2篇，合計40篇におよぶ．これらのすべてを通読して，菌類に関係ある単語ばかりでなく，菌類と思われる記述，そのうえ菌類を連想させる言い回しまで発掘しようというのだから，おそろしいほどの根気と，和漢の文化についての下地を必要とする．たとえば「…母にあい竹の，涙に…」という狂言の台詞の「竹の涙」のくだりを，史記にある斑竹の伝説からの引用と考え，その成因が菌の感染によるため，と連想するのだから，著者のうち込み方が想像できる．小学校時代の教科書に，清少納言の「香爐峰の雪」のエピソードがあったことを思い出した．古典から思いのままにトピックをとりあげる安直なやり方は，語源論をはじめとして文章を書かねばならないときによく行われるが，それを拾い尽くそうという大変な仕事，ぜひ続けていただきたい．古い絵画や道具に描かれた植物についても，その同定と移入や認知の時代考証を文科系の人がやっていたことがあるが，発展していない．目立たないが日本文化の理解に大事な仕事である．索引がないと折角拾いだした用語や現象を読者がたどることができないので，是非心掛けてもらいたい．入手希望者は下記に葉書で連絡されたい．350-■ 坂戸市■ 三浦宏一郎．　（金井弘夫）